

吉井川上流域の古墳

鏡野町内には、およそ五〇〇基の古墳が存在しますが、そのほとんどが町域南部の丘陵地に築かれています。北部では、上齋原地域には古墳の存在は確認されておらず、富地域・奥津地域ではそれぞれ十数基が確認されていますが、奥津地域については、二〇年前頃には長藤の石引山古墳（町指定文化財）が、ただ一基知られているのみでした。



石引山古墳

さ約三・二mの横穴式石室をもつ円墳です。古墳を覆っていた盛土や石室の石材の一部は、長い年月の間に流失していますが、ほぼ原形をとどめています。発掘調査を実施していないので、古墳に納められていた副葬品等は不明ですが、古墳の規模や石室の様子から、古墳時代後期、六世紀末頃に築造された古墳ではないかと推定されています。



盛土が復元された杉古墳

この石引山古墳は、元禄四年（一六九一）に書かれた江戸時代の地誌『作陽誌』にも「邑の塚原に石室ありて石を此の山に取る。故に名付くと。」という記述あり、長藤寺原にある石引山から古墳の石材を取ったという伝説がこの名前の由来になったようです。また、昭和二年（一九二七）刊の『苦田郡誌』には「小鴨火釜行一四尺、中六尺、高三尺」とあり、長藤に伝わる戦国時代の小鴨氏にまつわる悲話伝説から、小鴨火釜とも呼ばれていました。



久田原8号墳の石室

ただ、古墳が築かれる場所は、町域南部がそうであるように、基本的には集落が一望できるような丘陵の頂上や中腹部に築かれます。しかし、

吉井川上流部の古墳は、平成十四年に発見された久田神社古墳以外はすべて吉井川に近い平野部に築かれています。そのため、石引山古墳以外は、後の時代の水田開発等によって古墳の盛り土や埋葬施設が壊され、わずかな痕跡が水田の底に残ったのでしよう。

また、古墳時代後期の古墳は、一カ所に複数築かれることが多いので、石引山古墳や杉古墳の周辺にも、かつては複数の古墳が存在したと思われる。

吉井川上流部の古墳だけがなぜこのような場所に築かれていたかといえば、やはりこの辺りは急峻な山間部で、南部のような古墳の築造に適した緩やかな丘陵がなかったことが一番の原因だと思えますが、吉井川が交通・生活等、この地域の人々にとって重要な存在であり、この付近に墓を造るということに何らかの意味があったのかもしれない。

参考：『新訂訳文作陽誌』・『苦田郡誌』・『鏡野町の文化財』・『奥津町史』・『通史編』・『久田原古墳群』・『久田神社古墳』・『発掘調査報告書』

お詫びと訂正
一月号のこのコーナーで誤りがありました。心よりお詫びし訂正します。
①二段目一〇行目
誤 大阪の人物師 ↓ 正 淡路の人物師
②三段目八行目・四段目九行目
木櫃の入手経緯や時代が不明のため、町内で「箱廻し」が行われたという根拠にはなりませんでした。

生涯学習課 目下
電話(0868)54-7736